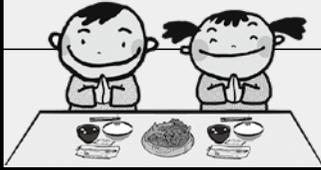


「貧困問題」を考える

食 べ る 事 物



はじめに

日本において貧困問題は、リーマンショック時に開設された「年越し派遣村」や、政府による「子どもの貧困率（相対的貧困率）」の発表などによって急速に重要な社会的課題として認知されはじめました。その後、日本全国において様々な団体が貧困問題に対する活動を展開していますが、宗門では、二〇一八（平成三十）年度より、「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）・重点プロジェクトとして「貧困の克服に向けて～Dana for World Peace～」子どもたちを育むために」を掲げ、宗派一体となった活動を展開しています。そうした活動の中で多く展開されている一つが「子ども食堂」です。「子ども食堂」の活動は、「食卓を囲む／一緒に食べる」という普通の行為がどれほど重要なことであったのかを再認識させられるものでした。この「食（食べる）こと（食）」は、寺院活動におい

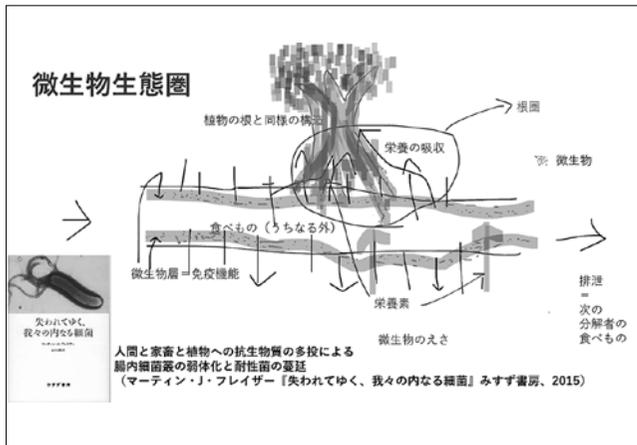
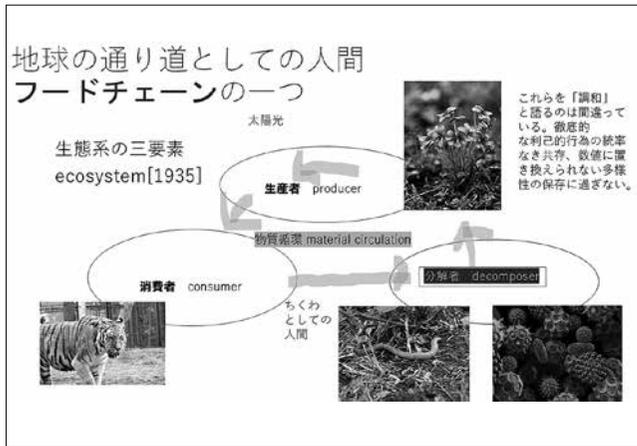
ても重要な役割を担っていたと考えられます。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大にともなう「新しい生活様式」の推進によって、「食（食べる）こと」は大きな影響を受けました。全国各地で「子ども食堂」は相次いで中止され、多人数による会食の中止、黙食が推進され、寺院活動においてもお斎の中止が相次ぎました。

こうした現状を受け、総合研究所では「食（食べる）こと」の役割やあり方、あるいは、新型コロナウイルス感染症拡大をうけて「食（食べる）こと」がもっていた役割をどう補完していくのかということの研究する一貫として、歴史学（農業史・環境史）を専門とし、「食」に関して多くの研究成果を発表されている京都大学人文科学研究所准教授の藤原辰史先生をお招きし、研究会を開催しました（二〇二二年十二月）。藤原先生の発言をもとに、研究会の内容を総合研究所にてまとめ、報告いたします。

一・食べることの

エコロジカルな読み替え

藤原先生は、「食べることを二つの側面から説明されました。まず、「食べる」ことのエコロジカルな読み替えです。「食べる」という言葉、あるいは、私たちが「食べることを考えよう



(スライド：講師提供)

とする際、どうしても「〇〇を食べる／食べない」といったことを中心にして考えがちです。しかし、当たり前のことですが、「人間は食べれば排泄します」。「食べることを、一人ひとりの何を食べ／食べないか。あるいは、どう食べるかといった部分だけにとどめて考えるのではなく、自然環境の中で植物や動物が生きて、その植物や動物を調理して食し、食

したものを排泄していくという全体から「食べることを考えようとするのが「食べる」ことのエコロジカルな読み替え」です。

そのため藤原先生は、人間を「排泄する動物」「物質の通り道」と捉え、「フードチェーン」という生物学で用いられる言葉を出しながら「生産者―消費者―分解者」という循環の重要性を述べられた上で、特に「分解者」に注目されました。

例えば、植物であれば地中にはった根において植物自身が養分を一部地中に出し、地中の分解者の活動を活性化させることで、植物自身が成長しています。人間もこれと同様に、腸内において分解者(菌)が活動し、排泄を行い、その排泄物がまた分解されることで地球の養分となり、再度、生産者(植物)を経て、人間は再度、消費者・分解者となる。こうした「地球の循環の中に人間を位置づける」ことは、「食べることを消費すること」だけでなく「食べることを分解すること」という位置づけを与えます。

このように捉えるならば、人間もまた「大きな循環」の中の一つだといえます。そして、この視点の重要性は、「大きな循環」が止まるという場合を想定するのとで明らかとなります。例えば、公害をはじめとする「地球規模での環境問題」が挙げられます。「地球規模での環境問題」とは、「生産者―消費者―分解者」という循環の中に、「永遠（とも思える時間）に分解されないものが入る」「毒が入る」ということだからです。このことは人間においても同じであることを、近年人々が抗生物質を取り入れすぎたことで、腸内環境（分解者）のバランスが崩れ、アレルギーの増加といった問題が引き起こされているという例を挙げられました。

また、「分解者」に注目することは、具体的な行動にも深く関わります。例えば、分解者を森林や土壌と考えるならば、「無駄な伐採をしない」「動物の住環境を奪わない」「アスファルトばかりにしない」といった自然との関わりから私

たち自身の行動を見直すことにつながります。また、「私自身は分解者である」と考えるならば、なによりもまず「自身自身の生活を見直すこと」が大事になってきます。

二．食 べ る こ と の ソーシヤルな読み替え

この立場は、「食 べ る こ と」を社会的な観点から捉えようとする立場です。代表的な例として「共食」があげられます。特に宗教祭祀（儀礼）に顕著に見られるような、「神仏に食を捧げ、その残りを共に食べる」という行為です。藤原先生は、「同じものを食べ、飲む」という行為（共食）が連帯感の構築に関わっていたのではないかと述べられました。

「共食」が、宗教だけにとどまらず人間にとって重要な行為であることは、「子ども食堂」の事例からも理解できます。

そうしたことを前提に注目されたのは、「共食」に反するような事例が社会

に存在することです。例えば、昭和時代前半から「孤食」（孤独の食事）として、多くは「子どもが一人で夕食を食べる」現状が報道され始めました。おそらくこうした現状は、新型コロナウイルス感染症拡大によって、「子ども食堂」を失った子どもたちや、外出制限によって一人で部屋にとどまらざるをえない人たちなど、多くの人々が直面している問題であると考えられます。また、二〇一〇年前後には、「便所飯」という言葉とともに、他人と関わりを持ちにくい。あるいは、他人と関わりがないことを知られたくないためにトイレで食事をする学生（大学生、高校生など）が増えていることが報道されました。

こうした問題を背景として、藤原先生が近年、提言されているのが「縁食」です。これは、「（強制力のない場所などで）家族以外の人とともに食べる」ことです。（詳細は、『縁食論―孤食と共食のあいだ』。縁食の一例として、「ばんざい東あわじ食堂」(<https://snailtrack-higayodo.com/>)

service/Banzainigashinawaji)の活動を紹介されました。ここでは、「無料冷蔵庫」

(余ったものを自由に入れ、欲しい人が勝手に冷蔵庫からとっていく)、「しゅくだいカフェ」の併設など様々な活動が展開されています。藤原先生が注目されるのはこの点です。単なる「食べる場所」というだけでなく、「出会い」「教育(格差解消)」「家庭状況の確認」「子どもの健康状態の確認」など、訪問(ワンアクション)者に多様な「リターン」が存在することで、こうした場所こそ「サードプレイス」「何気ない場所」と呼べるのではないかということです。また、「子ども食堂」のような第三者のために何らかの場所を設定する場合には、「自分の思いを反映するような支援をしない」「自分が助けたいという思いを前提にして支援をしない」ことが重要であるとも指摘されました。

こうしたことに加え、「本当に頼れる人がいない」「大人に対して不信任がある」「大人と関わりたくない」という思

いを持った子どもが「そもそも子ども食堂に行くわけがない」と考えることの重要性を指摘されました。子どもたちの心を理解することが第一歩であり、その上で、子どもたちが関わりを持ちやすいよう可能な限り「行きづらい要因を排除する」必要性があり、そうしたことから、「寺院で子ども食堂をする」ことは、子どもが関わりやすいという利点があるのではないかと述べられました。

三．食べることの エコノミカルな読み替え

この立場は、「食べること」が資本主義経済の中でどのようなのかを見ていこうとする立場です。藤原先生は、一例として「種子」に注目されました。現在は、大企業が「種子」を作り、その種子を生産者が購入するだけでなく、「種子」を成長させるための肥料、道具などすべてが「パッケージ化」されています。一旦「種子」を購入すれば、生産者

は常に購入しなければならず、それはそのまま企業の利益確保になり続けるというシステムが構築されているのです。しかも、生産者が作ったものは、「大規模小売り」によって値段が抑えられてしまふ。あるいは、形が悪いもの、傷が付いているものなどは購入されにくいといった状況があります。つまり、生産者に過度な負担がかかる生産システムが構築されているのであり、藤原先生はこの現状に対し強い危機感を示されました。また、「食べもの」は「商品」として値段がつけられているが、その値段の大部分は「広告費」という現状があること、フードロスとは単に残飯というだけでなく、「パッケージ化」されたまま食品が廃棄される(例:コンビニのお弁当。地球の循環を阻害する物質が捨てられている)ことなどの課題があることもあわせて述べられました。

こうした点から、今後「食べること」を支える「農」^{のち}をいかに社会が考えていくかが重要であると述べられました。

藤原先生は、「食 べ る こ と」をエコロジカル・ソーシヤル・エコノミカルという三つの立場から捉え直され、「食 べ る こ と」が持つ豊かな側面を指摘されました。加えて、寺院でのお齋や、葬送儀礼の際での食事の風景などを思い返してみると、祖父母から子や孫世代への「知の伝達」や、「気持ちや体験の共有」といった側面を考えることができ、「食 べ る こ と」には、私たちが思う以上の意味・役割があったと気づかされます。

こうした「食 べ る こ と」がもつ「豊かさ」は、新型コロナウイルス感染症によって「食 べ る こ と」が制限（人数・時間の縮小、黙食の推進など）されたことでどのように影響をうけ、その影響はいつ、どのような形であらわれてくるのか。「食 べ る こ と」が制限されたことで失われたことをどのような形で補っているのか。現代において「食 べ る こ と」を考える重要性は非常に高まっているといえます。そうしたとき、

「食事のことば」をつねに自ら声に出すことによって、食事はただ漫然と食物を摂り、栄養を補給するものではなく、目の前の食事には、そこまでに至る大きなおかげとめぐみがあることに気がきます。そのことによって、ものの本当の価値を見出す人間性が養われていくことになることでしょう。

（『新「食事のことば」解説』）

と説明されている「食 べ る こ と」の意味・役割を再確認することはとても重要だと感じます。その上で、どのようにしてそうした意味・役割を伝えていけるのか。こうしたことを引き続き考えていきたいと思っています。

（総合研究所 教団総合研究室）

【講師略歴】

藤原辰史（ふじはら・たつし）

京都大学人文科学研究所准教授。一九七六年、北海道旭川市生まれ、島根県横田町（現奥出雲町）出身。一九九九年、京都大学総合人間学部卒業。二〇〇二年、京都大学人間・環境学研究所中途退学、同年、京都大学人文科学研究所助手、東京大学農学生命科学研究科講師を経て、現職。

主な著書に『ナチス・ドイツの有機農業』（柏書房、二〇一二、第一回日本ドイツ学会奨励賞）、『ナチスのキッチン』（共和国、二〇一六、第一回河合隼雄学芸賞）、『食 べ る こ と 考 え る こ と』（共和国、二〇一四）、『トラクターの世界史』（中央公論、二〇一七）、『戦争と農業』（集英社インターナショナル、二〇一七）、『給食の歴史』（岩波書店、二〇一八、第十回辻静雄食文化賞）、『食 べ る と は ど う い う こ と か』（農山漁村文化協会、二〇一九）、『分解の哲学』（青土社、二〇一九、第四十一回サントリー学芸賞）、『縁食論』（ミシマ社、二〇二〇）、『農の原理の史的研究』（創元社、二〇二二）がある。二〇一九年二月には、第一五回日本学術振興会賞受賞。